

プロジェクト課題活動状況

No.1 気仙沼階上地域の新たな農業の展開

対象及び対象数 シーサイドファーム波路上株式会社 (3人)

担当チーム員 ◎泉井亮平, 福原弘芳, 杉本達郎, 佐藤直紀, 庄子雅和, 亀井克芳

設定した目標	取組状況	今後の対応
<p>① 適正な運営, 栽培管理による出荷量の増大</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 秋冬ネギを 5/11 から定植し, 総面積 3.0ha(内実作付面積 2.5ha)を 6/26 に終了した。</li> <li>・ 春ネギの作付けも検討したが, 今年度の栽培は見送った。また現在夏ネギの栽培を検討しているが, 動員可能人数・人件費の関係から今は小規模にとどめるべきと考える。</li> <li>・ 一部で葉枯れ病, さび病が発生しているが, 生育はおおむね順調。</li> <li>・ 8/21 に決算処理指導が終了。</li> <li>・ 第1期(H28.7.1 ~ H29.6.30)は販売実績がなかったため赤字決算とした。</li> <li>・ 資金繰り表の作成支援等行っているが, 資金繰りが難航しており, 将来の資金確保に向けて, 早めの対処が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 秋冬ネギの生育はおおむね順調であるため, 継続的に病害虫防除等の指導を行う。</li> <li>・ 11月よりイチゴ親株を定植し, 苗生産が開始するため, ネギと同様に適期技術指導を行う。</li> <li>・ 第1期の決算は終了したため, 第2期における日々の記帳について支援を行う。</li> </ul>
<p>② 地域の連携による, 営農協力体制の構築</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ SSF は C4 事業の受け皿である階上機械施設利用管理組合の事務局を受け持っているが, 法人に事務局運営のノウハウや人材的余力がないことから, 機会利用料金の徴収など, 機械施設利用管理組合の経理が適切に行われていない</li> <li>・ SSF 及び階上大谷生産組合によって機械の稼働率は伸びており, 機械施設利用管理組合を媒介した地域全体での営農が構築しつつある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 任意組合である階上機械施設利用管理組合の 12 月における決算に向けて, 事務局である SSF に対し, 機械等利用料金の徴収や, 利用時間の記録, 帳場管理など事務局運営支援を行う。</li> </ul>

プロジェクト課題活動状況

No2. 集落営農組織の経営体質強化による地域営農体制の構築

対象名及び対象数 西戸川地区営農組合 11 人, 在郷営農組合 11 人, 廻館営農組合 14 人  
担当チーム員 ◎阿部定浩, 杉本達郎, 佐藤直紀, 庄子雅和, 安藤美咲, 亀井克芳

設定した目標	取組状況	今後の対応
① 営農組合の営農再開 1 年目の営農計画策定とその着実な実行が行われる。	平成 29 年の作付前に廻館営農組合と JA, 町, 普及センターにより営農再開 1 年目の営農計画の検討を行った。 水田（水稲）は営農組合が特定農作業受委託により共同経営し, 畑地は個別又は担い手が借り入れする個別経営を行うこととした。	廻館では, 水稲部門の営農を再開して初めての経理処理となることから, JA と連携して一緒に支援する
② ほ場整備地区内営農組合の農地利用集積によりオペレータの収益が確保される。	西戸川, 在郷は人・農地プランを更新し, 廻館は新たに作成して, 工事後に引き渡しされたほ場の営農組合への集積が合意されており, 町及び JA による地権者説明会, 契約会が行われ, 営農組合代表者と地権者による農地中間管理機構を通じた賃貸借契約が進められている。	一部のほ場が道路工事及び河川工事の進捗の影響により作付けできない状況となっているので, 工事の進捗を把握しながら, 営農組合への集積を誘導する。 水稲は営農組合に集積されているが, 畑地は利用方法が検討中（未利用地）となっているほ場もあることから, 営農組合の効率的な農地利用調整を支援する
③ 地域の平均的水稲収量量が確保される。	西戸川では, 主食用米は作付 3 年目となるほ場では工事で客土された作土層に対して堆肥等施用による土づくり・地力増進等により, 水稲の生育は概ね順調とみられる。 廻館では, 初めての水稲作付となるが, 客土された土に地力がみられ, 水稲生育は概ね順調である。 在郷では, 主食用米は作付 3 年目となるが, 客土された作土層の土づくり・地力増進等が必要となっていることから, 基肥の施肥量を増やした土壌改良プログラム実証ほを設置している。	各工区での主食用米の等級割合を確認し, 栽培管理面の評価・反省行い, 来年産米の栽培管理方法の改善・工夫に活かす。 土壌改良プログラム実証ほの調査結果・考察を踏まえて, 来年産主食用米の肥培管理等への助言を行う。

プロジェクト課題活動状況

No.3 小泉地区の復興を牽引する法人経営体の生産安定化

対象及び対象数 株式会社サンフレッシュ小泉農園

担当チーム員 ◎佐藤(郁), 福原, 泉井, 佐藤(直), 杉本, 小野寺

設定した目標	取組状況	今後の対応
<p>①</p> <p>生育状況に応じた的確な栽培管理・環境制御により、出荷量を増やす。</p> <p>※1月末までのトマト出荷量</p> <p><b>H27 103t</b></p> <p><b>H28 162t</b></p> <p>H29 182t</p> <p>(太字は実績)</p>	<p>JAとともに毎週トマトの生育調査を行い、以降の栽培管理や環境制御のポイントについてアドバイスした。H28年に定植したトマトの1月末までの出荷量は162tで、目標の160tを達成したが、収穫期間を通して尻腐れ果の発生が多かったことが課題。特に、単価が高い10月から1月にかけて、尻腐れ果の発生で何度か出荷量が落ち込んだことが平均単価の低下にもつながっている。</p>	<p>尻腐れ果の多発は生育初期の根張りが不十分だったことが原因と考えられることから、今年定植のトマトは、栽培面積の半分を、水管理がしやすく根が張りやすいロックウール培地と交換しており、今後は培地内の水分率なども確認しながら生育ステージに応じた根域管理が行われるよう支援していく。</p>
<p>②</p> <p>法人栽培責任者の環境制御技術が向上し自らの判断で制御できるようになる。</p>	<p>トマトの生育調査方法については法人の栽培責任者も習得しており、調査人員が足りない場合には一緒に生育調査を行っている。また、調査結果を基に作成されるウィークリーレポートからトマトの状態を把握し、以降の栽培管理や環境制御に生かしている</p>	<p>H29年定植の大玉トマトは、2品種になる。また、調査項目も増えることから、毎週の生育調査については法人とJA、普及センターが協力して実施する予定。</p>
<p>③</p> <p>原形復旧農地において、法人が主体となった水稲生産が円滑に行われる。</p>	<p>昨年は水稲の作業全般についてJAに委託していたが、今年度は育苗管理をはじめ、機械作業のためのオペレーターの手配や肥培管理なども全て当該法人が行っている。なお、地力不足のために葉色が淡くなり追肥が必要と判断されるほ場があったが、トマトの作業との兼ね合いで追肥をすることができなかった。</p>	<p>H29年産米が良質米となるよう適期刈取について指導する。また、次作については途中で肥料切れを起こさないよう土づくりや基肥の施肥設計について指導する。</p>

プロジェクト課題活動状況

No.4 復旧農地でのねぎ安定生産技術の確立

対象名及び対象数 在郷営農組合畑作班（大谷営農組合，シーサイドファーム波路上株式会社，株式会社グリーンファーマーズ宮城）

担当チーム員 ◎福原，阿部，泉井，安藤，佐藤（郁）

設定した目標	取組状況	今後の対応
<p>① 出荷量の増加が 図られる。</p>	<p>昨年定植した春どりねぎは，秋以降のほ場の日当たりが悪かったため年内生育量が確保できず，収量は低かった。来年の春ねぎは，年内生育量を確保するために早めに播種する予定であったが，収穫作業と重なったため播種が遅れた。少ない労力で適期作業が行えるように作業体系の見直しについて助言を行った。</p> <p>秋冬ねぎのほ場は雑草の発生が著しく，除草剤散布と抜き取りによる対応に時間を要した。今年ほどのほ場でも雑草の発生が目立っているため，定植時の除草剤散布を必ず行うように指導する。</p> <p>6月下旬に収穫したハウスねぎは収量が高く，露地春どりの後に収穫できるため，作業分散の意味でも有効な作型である。</p>	<p>来年の夏ねぎとハウスねぎの播種・定植について指導を行う。雑草対策については，定植時の除草剤散布を徹底するように指導する。</p>
<p>② 作型に適合した 有機物供給方法 が導入される。</p>	<p>緑肥施用実証ほを設置して効果を比較し，作型に合わせた緑肥の選定を行っている。緑肥の普及拡大を図るため，8月に緑肥施用に関する現地検討会を開催した。</p>	<p>緑肥のすき込み後に土壌三相分布等の調査を行って緑肥の効果を検証し，作型に適合した緑肥作物の選定を行う。</p>

プロジェクト課題活動状況

No.5 ビーンズクラブの活動安定化による入谷地区の都市と農村の交流活性化

対象名及び対象数 ビーンズクラブ 6人(ひころの里, さんさん館, いりやど, 民泊受け入れ農家)

担当チーム員 ◎庄子雅和, 阿部定浩, 安藤美咲, 亀井克芳, 狩野篤

設定した目標	取組状況	今後の対応
① 受け入れ体験メニューの質 ・数が向上し、地域を訪れるリピーターが増える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入谷地区では順調に民泊の受け入れがなされており、県内外に留まらず、海外からの学生も入谷地区を訪れている。</li> <li>・南三陸町農林水産課と打合せを行った。GTは農林水産課が担当し、民泊、農業体験の窓口、ホームページでの参加者募集等は観光課と観光協会が担当している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・関係機関や対象へのヒアリングを進め、浮かび上がった課題解決のための研修会を開催する。</li> <li>・南三陸町観光課及び観光協会と相談し、民泊受入農家への具体的な支援内容を検討する。</li> </ul>
② 加工品が地区内宿泊施設に提供される。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度実施した豆腐購入者アンケートでは、味については美味しいと答えた方の割合が約7割を占めたものの、昨年度実施のアンケートと同様に品質の安定化を望む意見が多い。</li> <li>・豆腐品質の不安定さは、ビーンズクラブ自身も自覚しており、その原因の1つに経験不足が考えられる。豆腐原料となる大豆の収穫量が不足しており、豆腐を作る機会が少ない現状にある。そのため、今年度は大豆の収量及び品質向上のための技術的支援を中心に行ってきた。</li> <li>・手作業が中心になっているビーンズクラブの大豆栽培向け栽培暦を、普及センターで作成・配付した。この内容に準ずるよう栽培管理が行われていることもあり、大豆の生育は順調である。</li> <li>・大豆の播種は6/3に、播種体験として5名を受け入れ、6筆(38a)すべて完了した。収穫についても体験受入を行う予定。</li> <li>・全体的に出芽は良好であったが、一昨年度に収穫された種子を播いた一部の畑では、出芽不良となり、急遽購入した種子を播き直した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大豆の収量及び品質を確認し、栽培管理面の評価をする。この結果を来年度実施の大豆の栽培に活用する。</li> <li>・豆腐づくりに関し、消費者アンケート結果を踏まえた製造技術の研鑽に加え、チェックシートを用いて衛生管理面の意識向上を図る。</li> </ul>

